

# モバイル画像と無線 LAN に注目 企業向けソリューションも充実

WIRELESS JAPAN 2003の展示会ブースで新しく注目を引いたのは、カメラ付き携帯電話を使った画像活用と、企業向けの無線 LAN ソリューション。業務アプリケーションも充実し、ワイヤレスの企業活用が脚光を浴びた。

WIRELESS JAPAN 2003の展示会では、来場者が前年比2000名増加の3万6000名を超え、熱気で包まれていた。ここでは、主な出展製品を取り上げ、ワイヤレス/モバイル分野のトレンドを紹介する。

まず、携帯電話キャリア3社のトレンドを見ていこう。

携帯電話3キャリアに加え端末メーカーもこぞって注力していたのが、カメラ付き携帯電話を使った撮影デモ。各ブースでは、カメラ付携帯電話を片手にコンパニオンを撮影する来場者が列をなしていた。

NTTドコモは、撮影した携帯電話の画像をプリントするソリューションを展示。これは富士写真フィルムが新しく発売した小型の携帯電話用プリンター「NP-1」である。コン

パニオンが来場者を撮影し、携帯電話に蓄積した画像を赤外線通信を使ってプリンターに転送し印刷する。来場者は鮮やかに浮き上がる画像に満足げだった。なお、NP-1は富士写真フィルムのブースでも目玉商品としてアピールしていた。

カメラ付き携帯電話の元祖、「写メール」を生み出したJ-フォンは、ボーダフォンにブランドを変更することもあって、ブランドカラーである赤一色で大々的にアピール。ボーダフォンブランドが目につくほどのインパクトがあった。展示ブースでは、J-フォンの新製品、シャープ製の J-SH53 が数多く並べられ、さらに撮影した画像をパソコンのプリンターで印刷。画像のクオリティの高さを訴求していた。

KDDIブースも、カメラ付き端末、JavaやBREW対応の端末をラインナップ。なかでも、多くの来場者から注目を集めたのが、地上波デジタル放送用の試作携帯端末である。地上波デジタルの信号をエミュレート(模倣)した無線LANと、上り回線用にPHS(AirH)を活用し、画面上半分に地上波デジタルの情報を、下半分にWeb画面を表示。番組内容を下部のWebと連動させることで、インタラクティブなモバイル放送を実現するというもの。現在、地上波デジタルのモバイル放送は、仕様等が決まっておらず、商用化はまだ先だが、新サービスに期待する来場者は一目見ようとブースはあふれんばかりであった。

端末メーカーのブースでも、カメラ付き携帯電話を使ったさまざまなデモンストレーションを展開していた。三洋電機では、数多くのコンパニオンが、ボーダフォンの3G「Vodafone Global Standard」対応

## モバイルコンテンツセッション

### 既存産業へ広がるモバイルビジネス

モバイルコンテンツフォーラム事務局長 岸原 孝昌氏

例年、WIRELESS JAPANのカンファレンスでコンテンツセッションの企画をお手伝いさせていただいているが、本年はモバイルビジネスがさまざまな意味で変革期に差し掛かってきていることを実感することができた。

一言でまとめると「モバイルビジネスは、モバイル業界におけるバリューチェーンの最適化を志向するフェーズから産業界全体におけるバリューチェーンの最適化を志向するフェーズへ展開してきた」といえるかもしれない。今回のセッションで明らかになってきたのは、次のフェーズへ移行してきたモバイルビジネスは、その有力なメディアであり販売チャネルとしての機能を産業界全体のバリューチェーンへどのように最適化していくかということが問われようとしているということである。

NTTドコモの山口善輝氏のセッションでは、アライアンスをテーマとして赤外線や2次元バーコード等の外部インターフェースやマイボックス機能を利用したモデルとして紹介された。また、KDDIの高橋誠氏のセッションでも、さまざまなメディアとの連携の可能性が紹介されたが、注目は着うたの成功に

より音楽コンテンツビジネスが、今までのリアルなチャンネル中心からモバイルを組み込んだ新しいバリューチェーンモデルの構築へ進みつつあることを示されたことであろう。これは、音楽に限らずあらゆるビジネスがデジタルコンテンツを組み込んだバリューチェーンへと展開しつつあることを示している。

コンテンツプロバイダーが参加したパネルディスカッションでも雑誌やテレビなどのメディアミックス戦略がコンテンツビジネスの成功におけるキーファクターになってきていることが議論された。これからはモバイルコマースの拡大により販売チャネルとしても店舗等とのチャンネルミックスが現実的なテーマとなってくるだろう。

このように多くの機能を求められるフェーズでは、データ通信インフラの効率化が今まで以上に求められるようになるため、より効率的で安価なデータ通信環境を提供できるFOMA、CDMA2000 1xEV-DO等の次世代ネットワークへの移行は緊急のテーマとなっている。KDDIの高橋氏が指摘したように、データ通信料とコンテンツ料金のバランスが重要であり、マルチメディアコンテンツや

MCFで行われたモバイルコンテンツアワード2003



多くのコンテンツプロバイダーが参加したMCFブース

QVGA、高画素数のカメラ等の端末機能によるユーザーニーズを現実のものとするには、モバイル業界の最適化もより洗練させていかなければいけないだろう。このように、日本においては、産業界全体のバリューチェーンの最適化を目指すフェーズへと進行しているが、海外では、モバイル業界における最適化が志向され始めた段階である。世界最大の有力なプラットフォームとしてボーダフォンは「Vodafone live!」をキャリア主導の日本モデルを踏襲しつつも、キャリアのパブリッシャーとしての立場をより鮮明にしようとしているようである。今後、新しいプラットフォームとしてモバイルビジネスを拡大させるのが、ご期待というところだろうか。

端末「V-SA701」を使ったビデオ撮影を実演していた。

パナソニックモバイルコミュニケーションズは、NTTドコモの最新機種「P505i」を披露。P505iでは、撮影した画像を自動的に装飾するエンターテインメント系の機能を強化。例えば、撮影した画像から顔の形を認識し、自動的に頭部分にティアラをかざせたり、ぱっちり目に修正することが可能だ。また、505iシリーズは数多くの画像を蓄積できる小

型メモリー規格である「miniSD」にも対応。来場者は、切手よりも小さいサイズのminiSDを手にとって熱心に見入っていた。

2つ折り端末のヒットメーカーであるNECは、若年女性向けを意識したピンク色の電話をアピール。他のブースに比べ年齢層が低いコンパニオンが、エンターテインメント系の機能を中心に端末の機能や活用のデモを行っていた。なかでも多くの来場者の目を引いたのは、携帯電話を

リモコン代わりにしてミニカーを操作するカーレース。赤外線通信を使ったものだが、携帯電話のキーを押せば左右前後に自由にコントロールが可能。携帯電話を使ったカーレースを観戦する来場者で、人だかりになっていた。

京セラは、auの回転スライド式の携帯電話「A5305K」を展示。携帯電話の新しいスタイルをアピールしていた。

東芝は、au最新携帯電話端末



コンシューマー向けから企業向けまで幅広くサービス/ソリューションを披露したNTTドコモブース



携帯電話の赤外線通信を活用し、撮影した画像を写真プリント。富士写真フィルムの小型の携帯電話用写真プリンター「NP-1」

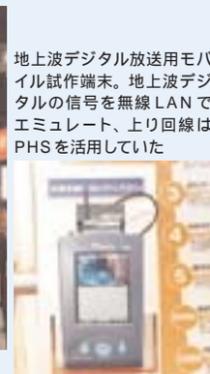


カメラ付き携帯電話で撮影した画像をPCプリンターで印刷。精細な画像がプリントされた

ボーダフォンカラー色のJ-フォンブース



テーマ別に分かりやすく展示していたKDDIブース



地上波デジタル放送用モバイル試作端末。地上波デジタルの信号を無線LANでエミュレート、上り回線はPHSを活用していた



三洋電機のブースでは、J-フォン3G携帯電話「V-SA701」を使ったビデオ撮影のデモを行っていた

カメラ付端末のデモでにぎわう三洋電機



デモ機がずらりと並べられていたパナソニックモバイルコミュニケーションズのブース



撮影した顔画像を認識し、自動的に顔の位置を判断しティアラをかぶせるというエンターテインメント機能

SDよりもさらに小型になったminiSDカード



クアルコムでは全世界のBREW端末を陳列



EV-DOを使った動画端末を展示。動画の通信トラフィックをコントロールする機能を実装していた



シスコシステムズの「Cisco無線IP電話7920」



日立電線の無線LAN対応VoIP端末「Wireless IP Phone IPC5000」



PDAでIP電話通話を利用できるNECインフロンティアの「Pocket@i」



アイコムのVoIP対応無線LANルーター「SR-21 VoIP」

「A1304T」や高級機種「A5304T」、辞書機能が充実したJ-フォン「J-T010」、さらに無線LAN搭載のPDA「Pocket PC e750」を展示していた。

### PHSで高速伝送 256kbpsを実現

ワイヤレス技術の進化はとどまることを知らない。高速伝送や画像伝送活用を中心にさまざまな新しい技術も明らかになった。

DDIポケットは、PHSで256kbpsという高速通信を実現する通信カードの試作機を展示。ノートPCにつなぎ、データ圧縮ソフトを搭載することで、見かけ上500kbpsの速度を実現していた。

携帯電話分野では、クアルコムがCDMA2000 1xEV-DOを使って動画配信を行う試作機を披露。動画トラフィックをコントロールできる

機能を実装し、安定した品質を訴求していた。

携帯電話用チップセットを手がけるルネサステクノロジは、通信用ベースバンドチップとは別にアプリケーション用のプロセッサを用意した2チップのコンセプトを打ち出した「SH Mobile」を展示。Javaが高速に動く様子を実機を交えてディスプレイしていた。

NTTドコモでは、エイゾー社の「EIZO AirView」とFOMA「F2102V」を活用した動画を活用した遠隔監視ソリューションを展示。EIZO AirViewは、動画カメラを搭載した画像サーバーで、FOMAカードを挿すことでワイヤレスで遠隔監視を行える。通信ケーブルを敷設できないところで効果を発揮するものだ。FOMAを使ったいつでもどこでも動画で監視できる点で注目を浴びていた。

### 出展社の3割が無線LANを展示

今回最も出展数の多かったのが、無線LAN関連機器である。出展社の約3割が無線LAN関連製品を手がけており、端末機器や関連ソリューションが目についた。

標準規格を策定するWi-Fiアライアンスは、Wi-Fi対応の製品・ソリューションを集めた展示ブースを用意。アギアシステムズ、インターシル社などの半導体チップベンダーによる最新チップセットや、シスコシステムズの無線IP電話ソリューション、NTT-MEのWi-Fi ZONE対応の公衆無線LANサービス「ネオモバイル」などが展示された。

無線LANの新しい活用として注目されているのが、ワイヤレスIP電話である。ネクストコムでは、シスコシステムズの「無線IP

電話7920」を使ったデモを披露。端末を手にとった来場者は携帯電話に比べはるかによい音声品質に驚嘆するシーンも見受けられた。また、日立電線も無線LAN対応IP電話を展示し、多くの来場者を集めていた。

PDAと組み合わせて無線IP電話を実現したベンダーは、NECインフロンティアだ。米VL Inc社のIP電話ソフト「Gphone」を搭載した業務用PDA「Pocket@i(ポケットアイ)」を使い、通話をしながら業務ソフトを動かしたり、音声認識を行うデモを行っていた。

ワイヤレスIP電話ではないが、無線LANルーターに有線のVoIP電話機能を搭載した装置も登場した。アイコムのVoIP対応無線LANルーターがそれだ。IEEE11a、11b、11gにも対応し、コンシューマー需要を狙うという。

さらに、企業利用では欠かせない

無線LAN対応のセキュリティ対策として注目が集まっているIEEE802.1x対応認証サーバーが数多く展示されていた。

コンテックのブースでは、マイクロ認証サーバー「SVR-RDS」を出展。これは小企業ユーザーを狙ったもの。ネクストコムは、無線LAN認証サーバーとVLANスイッチの機能を統合した「ARUBA5000」を展示。ユーザーごとにVLANセグメントを切り替えたり、無線LANの暗号化鍵を管理することが可能なセキュリティ装置だ。

### 企業向けソリューションが充実

企業向けの数々のモバイルソリューションが披露され、多くの情報システム担当の来場者が熱心に説明員の話に耳を傾けていた。

PDAの分野では、Pocket PCゾ

ーンで、アイ・ピー・エス・ジャパン、ACCESS、構造計画研究所、シーイーシーが出展。アイ・ピー・エス・ジャパンは、バーコードリーダー代わりにPDAを活用した商品管理の業務アプリケーションを披露していた。

アイエニウェア・ソリューションズがPDAに搭載できるモバイルデータベース「SQL Anywhere Studio」、PDAとオンライン、オフライン同期を行う「Web Anywhere Studio」、端末管理を行う「Manage Anywhere Studio」をパネル展示。PDAに対応したモバイルアプリケーションを開発するソフト開発者や、情報システム担当者が新機能に関する説明を熱心に聞いていた。

モビマジックは、携帯電話、PDAを中心としたASP型のグループウェア「WiZus」を実機を交えて紹介。携帯電話だけでファイル保存や、会議予約などさまざまな機能を



携帯電話端末に加え、企業向けモバイルソリューションにも注力していたNECブース



NECでは若年女性をターゲットにした「ラブリィピンク」カラーの端末を展示



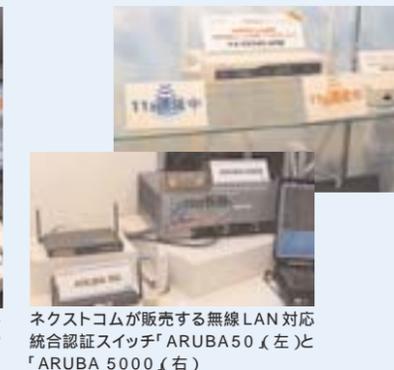
DDIポケットの256kbps対応PHSデータ通信のデモ。データ圧縮を使い、見かけの速度は500kbpsを超えた



FOMAを使ってワイヤレス通信が可能なカメラ搭載画像サーバー「EIZO AirView」富士通のFOMA端末「F2102V」と組み合わせ動画を使った遠隔監視を実演



NTT-MEのブースでは、犬の世話をしたり、監視ができるリモート監視ソリューションを展示



ネクストコムが販売する無線LAN対応統合認証スイッチ「ARUBA50(左)」と「ARUBA5000(右)」



IEEE802.11aと11gを同時に利用できるコンテックの無線LANアクセスポイント「FX-DS540APW」

アイコムのパラボラ型無線LANアンテナ「SB500」



ホットスポットサービスが利用できるビジネスラウンジ。インテル、NTTコミュニケーションズが提供しており、多くのビジネスマンが商談と休憩の場として利用していた

無線 LAN 搭載ノート PC 規格「Centrino(セントリーノ)」を一面に押し出したインテルブース



モバイルキャストではオーディオを持ち込み、テレマティクスを使った生活をアピール



テレマティクスで利用する無線 LAN を搭載した自動販売機



実現しており、情報システム担当者が高い関心を示していた。

新しいワイヤレス技術を使った業務ソリューションでは、RFIDに注目が集まった。日本アイ・ビー・エム(日本IBM)では、関連パートナー企業によるアプリケーションの展示に加え、商品レジのデモを披露。RFIDを取り付けた商品を、ショッピング用のカゴに入れてゲートを通ると自動的に、商品点数や合計金額を計算するというもの。RFIDの新しい使い方として注目を集めていた。

NECのブースでも、IPv6の適用例としてRFIDを活用したパネルを展示。牛肉の品質管理という点から、放牧中の牛にRFIDを取り付け、牛肉になるまで一貫して管理するもの。アドレス空間が無限に近いIPv6と、固体識別が容易なRFIDの特性をうまく引き出したものだ。

その他に、コンテンツプロバイダーを支援するサービスや、車を使ったカーテレマティクスも展示された。

京セラコミュニケーションシステム(KCCS)では、モバイルコンテンツ分野のソリューションに注力。コンテンツプロバイダーのビジネスを支援するさまざまなサービスをパネル展示。特に注目が集まったのが、「3Dモバイルアバタ」の実演。来場者を撮影した写真を元に、あざらしや魔女などのアニメーションを3DCGによって合成。自分の顔が動物っぽくなり、まばたきしたり、うなずいたり、しかもしゃべった音声に合わせて動くというもの。今注目のモバイル対応インスタントメッセージャーへの適用を考えたものだ。加えて、画像変換サービス、海外コンテンツ事業支援のコーナーを設置。さらに企業向けには、BREWを活用したモバイルビジネ

スポーツ「BizW@Ikers」をパネル展示していた。

ブース中央にスポーティなオープンカー(オーディオ)を設置し、ひときわ目立っていたのが、モバイルキャストブース。モバイルキャストは、カーテレマティクスのサービスモデルの立ち上げを行うため、さまざまなソリューションを披露。さらに、無線LANでコンテンツ配信を行う自動販売機を展示していた。ブースのセンターに設置された大型ディスプレイでは、カーテレマティクスを使ってチケット予約を行ったり、音楽を聴いたりといった未来のカーライフスタイルを提言していた。

このように、WIRELESS JAPAN 2003では、画像を活用した新しい携帯電話サービスの在り方と、ワイヤレスを活用した業務ソリューションの方向性が見えてきたといえよう。



日本IBMブースでは、RFIDのソリューションを実演。RFIDを取り付けた商品をカゴに入れ、ゲートを通ると自動的に商品点数と料金が計算される



3Dモバイルアバタなどコンテンツプロバイダーを支援するさまざまなソリューションで盛り上がる京セラコミュニケーションシステム

Bluetoothセミナーなど技術セッションが好評だったMCPCブース

